

新刊
紹介

For some in ancient books
delight; Others prefer what mod-
erns write: Now I should be
extremely loth. Not to be thought
expert in both.

新島襄全集編集委員会編

『新島襄全集』第八卷

(同朋舎出版・発行一九九二年七月
菊判・七三三頁 一四、〇〇〇円)

待望の『新島襄全集』第八巻が七月に刊行された。この巻は新島襄の四七七年間の生涯の詳年譜である。既に新島の詳年譜は昭和三四年に故森中章光先生によって刊行されている。それは新島に魅せられ、ひたすらに新島に関する資料を収集し、判読されて作成された努力の結晶であり、アツと驚くような記述が随所に見られるが、残念ながら出典が明記されていないために、それを確認することができなかった。

しかるに今回同志社史料室の松井全

氏が主に整理・編集された詳年譜は(1)可能な限り新島襄の原資料にあたる。(2)記録の空白を補い、新島資料の裏付け、傍証のためその他の資料を補助的に利用する。(3)出典を明示する。(4)過去の研究の誤りを正す。(5)全体に疎密なく、バランスのとれた内容にする、といった編集方針にもとづいて、見事に新島の詳年譜を完成された。これほど一人物の殆んど毎日の動きが正確かつ詳細に判る年譜は他に例がないであろう。

松井氏は『新島襄全集』の編集作業が始まった昭和五五年以前から新島関係の著書・論文を繙き、準備された。今回の詳年譜には既に刊行されている『全集』一、二、三、四、五、六、十巻に収められている新島関係資料、とりわけ新島の和文、英文書簡や第九巻に収められる予定の新島宛書簡はもとより、新島道品庫に収蔵されている史料、既に公刊されている新島に関する伝記、同志社関係資料、アメリカン・ボード関係の英文資料、教会・学校関係資料、地方史、公文書、新聞・雑誌及び新島及び新島に関する人物・事象を伝える膨大な書物、論文をも渉猟されている。巻末に挙げられ

ている文献の豊かさとその数は驚きに値する。この詳年譜から松井氏の博学多識、緻密な考証、几帳面な性格、詳年譜作成の執念を読みとることができる。

菊判、五八ページに及ぶこの詳年譜を年を追って読んでも面白いし、アメリカ時代、或いは同志社大学設立運動の時代と限定して読んでも面白い。書簡の人新島、人脈の豊かな新島、キリスト教の宣教と全人教育に情熱を燃やし、明治二三年を期して同志社英学校を同志社大学に昇格させようとする執念の塊のような新島が毎日の動きの中に鮮明に見えてくる。この詳年譜が今後新島研究に寄与しうる点ばかり知れない程大きい。是非おすすしたい書物である。

井上勝也(大学文学部教授)

同志社大学人文科学研究所編
『北米日本人キリスト教運動史』

(APMC出版・発行一九九二年十二月
A5判・八八〇頁 一九、五七〇円)

同志社大学人文科学研究所では、約一〇年ほど前からその第一研究(キリスト教会問題研究)において「日本人移民社会と

キリスト教会研究」が継続されておこなわれてきた。本書には、その研究に携ってきた内外の一三名の学者たちが、一五篇の論文を寄稿している。何事においても、協力と継続は力であり、九一〇頁にわたる、本書の刊行にもおいててもそのことを感じさせられる。

本書は、三部から成っている。第一部の「移民社会とキリスト教」においては、ハワイを舞台として、飯田耕二郎氏が「初期の日本人キリスト教伝道」杉井六郎氏が「排日予防啓発運動」を論じている。飯田氏の論文では、従来から名前はあげられながら追われていなかった第一回官約移民とともにハワイに渡った青木牧師の働きがのべられているのが興味をひいた。ただ彼の名が英文資料では彼の名Keinoであつたり、Shinichiであつたりしていること、また、彼は同志社出身であるという一説があり、今後の研究がまたれる。杉井論文では、同志社の卒業生である奥村多喜衛の働きに焦点があてられている。アメリカ本土における日本人教会の働きを扱ったものとして、吉田亮氏の「カリフォルニアの日本人とキリ

スト教」坂口満宏氏の「排日問題と太平洋岸日本人キリスト教団」の二篇がありいづれも歴史的資料をふまえた力作である。「カナダの日本人移民社会とキリスト教」を扱った佐々木敏二氏の論文は、人文研のカナダ研究の先鞭をなす貴重な研究で、これらが起縁となつて、一九九〇年四月より同志社大学人文科学研究所は、カナダ政府からカナダ研究賞をうけ、カナダにおける日系社会と教会の調査研究をすすめるようになった。

第二部は、「クリスチャンのプロフィール」として、吉田亮氏が「ホノルル日本人教会の信仰表現者たち」飯田耕二郎氏が「ハワイの日本人社会に尽力した基督者」として主として神田重英の生涯を論じ、宮澤正典氏が「キリスト教青年による一移民集団」と題して穂高倶楽部のケースを紹介し、奥村直彦氏が「島貫兵太夫の『力行教育』思想」を取りあげ、茂義樹氏はシドニー・ギューリックに光をあてて排日法案との関係を論じている。森川真規雄氏の「香港の潮州人教会」は直接本書のテーマである「北米」とは関係がないが、移民社会と移民教

会の関係を扱ったものとして、また、のちのカナダ研究につながる伏線としては意味がある。

第三部には「日本人移民・日系人社会諸相史」のテーマで三つの論文がある。北米への日系移民研究を専門にすすめておられる大阪大学の阪田安雄氏が「不平等条約とアメリカ出稼」の題で、日本からの海外渡航の歴史的経過を綿密に論じている。「ヴァンリードと「元年者」を論じている福永郁雄氏は森村商事(株)で総務部史料室長をつとめておられる実業人で、巾ひろい視点からハワイ王国総領事であつたヴァンリードの日系移民に対する態度を分析している。カリフォルニア大学ロスアンジェルス校のイチオカ・ユージ氏の「第二世問題」の戦前の経緯を扱った論文は、きわめて示唆に富んでいる。たとえば、恵泉女学園の河井道が、一九三四年にすすんで、二世女性を教育するため二年間の特別課程を設置したことなどきわめて現代的意義をもっていることである。最後には関西学院大学の山本剛郎氏が「職業からみた日系人社会」と題して日系人の職業生活を論じ、一世が

なぜ、営業にこだわったのか、そして、二世三世がなぜ一世の職業をうけつがなかったかなどの問いに光をあてている。

巻末には、研究会の足取りを杉井六郎氏が記し、「アメリカ（ハワイ）カナダ関係事頃年表（一八五四～一九四二）」と「事項索引」があることは、研究者にとってはありがたいことである。

一九九一年には、日本ではじめて移民学会が設立された時代状況にあつて、本書は、このテーマについての人文科学研究所の共同研究をまとめたものとして評価されよう。ただ、出版が著しくおくれたこと、論旨が多岐にわたつたため、中心的焦点と課題が拡散したきらいがある。しかし、この論文集を一つのスナップとしてさらに研究がにつまつてゆくことを期待している。

竹中正夫（大学神学部教授）

武邦保著

『神の国』の社会学

—— 原典から歴史的展開へ ——
（法政出版・発行一九九一年一月）
A5判・二六六頁 二、七〇〇円

本書は、「著者のこれまでの研究と教育生活のささやかなまとめでもある」と、あとがきに記されているが、同志社大学大学院の法学研究科を卒業したのち、神学研究科に進み、さらにジュネーブ大学大学院に学び、研究と教育に誠実な歩みを続けて来られた畏友、武邦保氏の一筋の美しい歩みが、ほのかな輝きをあらわしているような書物である。

収められた文章のほとんどは、学術研究誌に一九六九年から一九八九年にかけて発表されたものであるが、加筆・修正されまゝとまりある一書となっている。

全体は三部八章から成っているが、著者は第一部「聖書の共同体観」において、イスラエル民族の信仰の社会的働きに焦点を合わせることによつて、そこには今日に生きるわたしたちに求められている連帯的共同体観が、すでに生きていたことを明らかにする。イスラエル民族は法によつて神の他者としての人格を確立したのであり、その法は信仰的トータル・システムにおいてイスラエルを一体化しようとした、と主張する。後半では、このようなイスラエルの共

共同体観が、キリスト教の歴史の中で如何に変質し、また発展して行つたかを跡づけている。

第二部「近代の日本社会とキリスト教」では、この問題をプロテスタントの日本伝道史の中で省察しようとする。幕末・明治期の価値観と明治初期の社会神学がテーマとされているが、日本の近代化の過程が組合教会との関連で、あるいはまたその時代を生きた横井小楠、新島襄、海老名弾正、原田助、柏木義円などをめぐつて論じられている。著者の近年の関心事でもあり、生き生きとした筆運びがなされている。

第三部は、「信仰の社会科学的发展」と題され、昭和初期に活躍した中島重に注目して、戦時下の緊迫した時代の中で展開された中島の社会的実践と社会科学理論とが温かく親しみを込めて明らかにされている。『神の国』の社会学』という書名についての説明はないが、著者は脱近代化への探索が静かに始まっている時として「今の時」を捉え、聖書の思想から人間の生きる意味と価値を示され、この激変する時代の中で、何を正しいものとして残し、何を新た

に創造して行くかを探し求めようとしているのである。

著者の意欲的・挑戦的な問いかけが、あらたな論議と実践を引起すことを願って止まない。

船本弘毅（関西学院大学教授）

竹中正夫著

『良寛を愛したキリスト者』

——小倉章蔵の生涯——

（日本基督教団出版局・発行一九九二年七月）
B6判・二五二頁 二、五〇〇円）

今年母校イエールから初回功労賞を受けた著者業蹟の余滴。明治以降辛苦の道を通った日本教界の人脈に光をあてる「和服のキリスト者」第三作。岡山地方の教史研究を含め章蔵との出会いは著者留学直後の倉敷教会長期応援時に始まる。「坊主頭と和服をまとい風呂敷を抱えさりげなく佇む」章蔵に秘かに心ひかれる。音楽学校同窓の母堂。その遺品整理で卒業後十六年後に出た写真アルバムと文集『おとづれ』三年分を発見。それらが皆章蔵の手によることに誘われる。高梁教会創立百年に講師として

招かれ作業は本格化する。

岡山から伯備線で北へ一時間。静かな山あい高梁川沿いの城下町に宣教の種がまかれたのは一八七九（明一二）年秋。岡山からの医療伝道に始まり女子教育（順正高女）も起り、近傍にも伝わる一綱島梁川、山室軍兵、留岡幸助ら輩出。風土と教会の歴史が「高梁市史」も用いて考証される。幕藩の儒者山田方谷のこと。播種四カ月後の新島再訪時の思い入れも高梁を鮮明に画いている。

章蔵は迫害期の信徒に接して入信した祖母友の信仰をうけつぐ。それら豊かな「信仰の遺産」から「学びの道」を辿り、「教師として」「信仰の旅」へと自筆の行状記や『おとづれ』、教え子の文・聞きとりにより、折々の場の対話表現も交えて縫われ行く。小柄な体軀・地味な所作の人は、牧師で順正校長だった伊吹岩五郎の奨めで上京遊学、留岡の家庭学校に寄宿した。卒えて順正の音楽教師、箏曲楽視奏も教える。やがて県立移管。足音を高める軍国化の波に勇退を促され、当時斯教と縁深かった紡績業界の教育畑も歩く。単身赴任。九州中津へ聖書も

説く。倉敷へ通勤・病院、徳島、高知へ女学校、教え子との出会い。信仰者として良寛の風情も語る。土佐教会。帰郷後はつましくも飄々と自適し、愛する人々に囲まれて神と人によく仕えた。水墨画をよくし、良寛様に心とむ言葉添えて惜しみなく与える。その写真数葉も収録。章蔵は筆の人、遊学時代の「江戸墓碣考」が「遺稿一覽」「おとづれ」発行一覽と共に巻末に附表掲載されているのも驚きだが、順正時代すでに石田梅巖も紹介されていた。

著者自身の縦横に織りなす考究と雅趣をからめて本書は奥行も深まり幅も広い。和服の信仰者を更めて我らの師魚木忠一の、日本とキリスト教の関わりを見る視点、信仰者を成功物語の枠で見ぬ識見も光る。本書末尾の章蔵作は逸品というべきだろう。

紅茶を飲む時つい匙を取り落した。其まゝまぜずに飲んだ底になる程うまかった
信仰の生涯もこの通りだといった

蕉雨（晩年の作）

寺崎蓮（同志社女子大学嘱託講師）

丸山敬介ほか著

『Talking Business

in Japanese』

(The Japan Times・発行一九九一年十一月
B5判・一二二頁・二、五〇〇円)

斬新である。日本語の教科書としては極めて斬新な教科書である。

まず、読んで面白い。読んで役に立つ教科書はたくさんあるが、悲しいかな、読んで面白い教科書というのは、日本語教育用教材ではまだまだ少数派である。本書をその稀有な存在にさせているのは、設定と展開、そして用いられている言語表現の自然さであろう。例えば、「十五パー引き」「名刺の文字は」カタカナでいきましようか」などの略語や表現が、教育的配慮の名のもとに規範的ではあってもどこか生気のない表現に置き換えられることなしに採用されている。

次に、レイアウトが実にすっきりとしている。日本語の教科書としては、これも珍しい。巻頭に英文で説明されているように、個々の単語や表現の習得に重きを置かず、ビジネス場面における会話の展開とその流

れを汲み取ることを重視するという本書の特色を反映して、通常の教科書には付きものの単語の対訳や細部にわたる文法説明がない。これでレイアウトがすっきりし、作り手の意図が明確に伝わってくる。

各課とも、初めに行動目的を示すタイトルとその課の学習目的、当該ビジネス場面における留意点が掲げられている。それに続くページには、話の展開がフローチャートで示されているので、この教科書が対象とする上級学習は、おそらく、会話部分を読む前に、自分の頭の中でどのようにポイントを押さえようかと考えをめぐらすことであろう。その上で会話へと読み進めば、自分の持ち駒と提示された表現とを比較対照することにより、表現の幅を広げていくことができる。

本書の最大の特色は、テキストという媒体を通して、『ビジネス日本語』という特定目的の日本語プログラムに対し、あるべきコースデザインの姿を提示したことにある。作成段階で日本語教師とその分野の専門家とが協力した教材は例があるが、本書のように、これを用いて展開する日本語プ

ログラムにも、日本語教師とビジネスマン教師とのチームティーチングを活用するよう促し、しかも、それを前提にしている教材は類を見ない。

基本構想自体が清新なのだから、できた教材が斬新になるのは当然のこと。ぜひ一度、使ってみたい教科書である。

才田いずみ（東北大学文学部助教授）

東 宏治著

『ムーミンのパパの「手帖」

トーベ・ヤンソンとムーミンの

世界』

(鳥影社・発行一九九一年十二月
四六変型判・二八〇頁・一、八〇〇円)

ムーミンといえば、いつかテレビでカバミみたいな動物の家族が登場するアニメドラマを見た覚えがある程度で、その原作がかくも清冽で豊饒なスウェーデン文学であったことは、この本を通して初めて知った。著者はまるで手品のように自由自在に原文を引用しながら、その魅力を語っていく。

と言っても、声高に叫ぶわけではなく、著者の言葉なのか原作者が書いているのか時

に分からなくなるほどに、著者と原作者が渾然一体となって、ムーミンの世界が再現されるのである。そこに本を読むという行為の最も幸福なありかたを見て、評者はとても羨ましく思った。書く人と読む人の固有振動数が一致した時、読む人の内部が作品に共鳴して自ずと響き出すことがある。その際、作者・読者という区別は消え、書く行為と読む行為が一つのものに化す。著者はそうした至福の体験を、静かで穏やかな語り口で伝えてくれる。これにはヤンソンと著者との間に共通する資質がなければならぬ。例えばヤンソンの父親は不思議に動物に好かれる人で、蝙蝠が彼の胸に吊り下がって眠ってしまったという逸話を紹介する章（一〇二頁）では、著者自身も蝶が指に止まっていたいつでも離れなかったことがあったという経験が語られる。それを読んでも思いつくのは、我が家の犬は著者に出会うたびに、異様な歓喜の声をあげることだ。著者はどうやらムーミン一家の一員らしい。とはいえ、マニアの偏狭さに陥っていないのは、西欧文学全体にわたる広く豊かな読書に基づいた明晰さが全体に浸

透しているからである。

動物とほとんど神秘的といっているいい交わりをもてることは、世界と親密に触れ合うことである。ムーミンの世界とは、人間が他の人間や動物、周りの樹木、水の流れ、光の揺らめき、そうした外界のすべてに対して、潑刺とした関係を結ぶ、淨福に満ちた世界であろうか。かつて日本では文学とは人生いかに生きるかを教えるものと考えられた時期があった。文学が倫理的な人生論の手引であったわけだが、この本を読むと、いま文学はもつと原初的、感覚的な意味でいかに生きるか、どのように世界と溶け合い、どれだけ豊かに今の瞬間を生きるかを示してくれるものに成熟したと言える。地味なこの書物が意外なほど好評をもつて迎えられているのは、環境・自然と人間との関係という今日の問題に深いところで繋がっているからだろう。

川合康三（京都大学助教授）

上野 瞭著

『晴れ、ときどき苦もあり』

（PHP研究所・一九九二年三月発行）
（B6判・二五八頁 一、五〇〇円）

「近藤さん、この間のぼくの本は、もう読んでくれはりましたか？」「いいえ、すみません。どんな本だったでしょうか。田辺キャンパスの研究室棟の廊下での、先生との会話である。正直に申しあげて、私はその時まで、わが敬愛する上野先生が、最近どんな本を出されたかも知らなかったのだ。同じ職場で、日頃何かとお世話になっている先生なのだから、少なくとも、ご著書の題名ぐらいは知っているのが礼儀というものである。」「ああ、〇〇という本ですか。ぜひ読まして頂こうと思っていたところですが、」などと言って、お体裁を整えることも出来たかもしれない。私のいい加減な気持ちを見透かされたかのように、先生は、「あなたには、ぜひ読んでほしいので、一冊差しあげましょう」と仰って、さっそく、さらさらと、日付と署名を入れて、頂いたのが、今私の手元にある『晴れ、ときどき苦もあり』という本である。誤解して頂きたくないが、先生の言葉には、決して押しつけない。日頃の先生のお人柄を知る人であれば、このようなことは言わずもがなである。先生が「読んでほしい」と言われ

るのは、そのまま先生の私に対する思いなのだ、と私は素直に受けとめるのである。

本を読むときには大抵そうするのだが、私は先ず、この本の「あとがき」に目を通した。その「あとがき」の中に、次のような一文があった。「ぼくは、『もの書き』と

か大学の教員とか、そういう肩書きを外した一人のオッサンの暮らしぶりや哀歓のほどを書くように努めたつもりである」と。

私もまた、上野という一人の「オッサン」の生き方、考え方が、この本の中に、どのように具体的に表現されているか、を知りたい、と思ったのである。人間虚飾に生きようとすれば、無性に疲れる。自分自身に對しても他者に対しても自由になれば、どんなに楽になれるだろう、と、この頃とみに思わされていたこともある。本文に収録された数篇のエッセーを読ませて頂きながら、上野という「オッサン」(失礼の段ご容赦)の、あの自由さが何とも眩しくかつ羨ましくてならなかった。本文は、著者の身辺の出来事を描いて、前後数年間の時間的間隔を置いているのに、不思議なほど、内容に一貫性がある。意図的なものか偶然

に過ぎないのか、私には分からないが、著者とその家族と共に、十六年六カ月の生涯を全うした「同居猫」の口吻の存在が、その一貫性の根拠になっているように、私には思える。限りなく自分が素直に、正直になれる本である。

荻野恕三郎著

『葆光の世界』

(南窓社・発行一九九一年十一月
A5判・二五九頁 三、九一四円)

近藤十郎(女子大学教授)

本書『葆光の世界』という題名は莊子「齊物論」篇の中の言葉「…此を之れ葆光と謂う」に依るものである。葆光の世界とは光を包み、蔽い隠した、露わならざるぼんやりとした世界のことである。この葆光の内に著者は二十一世紀以降の人類にとつての根本思想を見出す。著者によればそれは古代ギリシア以来の思想史を支配してきたアーテア(隠れなきこと、露わなること)を真理とする光明主義思想に取って代わるべきものである。光明主義とは洋の東西を問わず常に人類を支配してきた対立をもたらし思想のことである。明るい光のもと

非、善悪を明確に区別し、一方を選び他方を捨てるような、自己と非自己との間に境界を設け対立相剋の内に生き、あるいはその対立の一方にのみ真理を見出しそれに固執するような生き方が光明主義である。

明暗、善悪、生死等の一方を選び取るのではなく、対立そのものを超え、対立する両項を包みこみ、一切を包摂肯定して生きるところに葆光の立場がある。そこでは対立抗争も「遊び」となる。ここに「葆光の世界」は著者の根本思想である「遊びの哲学」へと連なる。対立矛盾の相対的世界を離れ絶対的世界を立てるのではなく、相対も絶対も包み入れた一切肯定の世界が遊びの世界である。世界の一面に固執することなく、どうなければならぬということもなく、あるがままなる世界を受け入れること、ただかくあるということにおいて一切はあり、一切は完結し満たされている。「遊ぶとは宇宙のリズムに乗ること」であり、ひとり人間に限らず宇宙の一切があるがままに遊びの世界においてある。

このような一切肯定の世界は観念的な夢想の世界にすぎないという批判に対して、

著者はこのような一切肯定の世界こそ、現に生きている我々の人生の現実そのものであると主張する。現実の世界は是非善悪、矛盾対立のすべてを含んだ世界にはかない。そのような世界を、自ら良しとしやうがしまいが、自ら納得しようがしまいが、現実に生きているのが我々の生の事実そのものなのである。人間がどう思うか、どうすべきかといった思想や当為の世界ではないのである。

すべてであるがまま、一切が宇宙の遊び、そのような「遊びの世界」、「葆光の世界」に身を置くことによって、日々おだやかにのんびりと対立抗争を包み越えた世界に生きることを得るのである。

考察の対象は、老荘思想、仏教思想はもとより、水墨画、建築、フアジイ理論から現代科学にまで及んで興味尽きることがない。人生の意味を根本的に問い直すことによって、心に安らぎを与えてくれる哲学の書であり、遊びの書である。

長澤邦彦（大学文学部教授）

望田幸男・大西広共著

『ゆらぐ大人』男性社会

（有斐閣・発行一九九二年四月
B6判・二〇五頁 一、五四五円）

本書は西洋史と経済学を専門とする著者たちが、これまでの蓄積を元に、混迷する現代日本社会の大胆な見取り図を描こうとしたものである。

著者たちが現代日本を眺望する上で選んだ視点は、「世紀末の若者と女性」である。というのは「世紀末」（ドイツ一九世紀末）と同じように、二〇世紀末の現代日本において、「新しい社会の先触れとして現存社会とのせめぎ合いの渦中に立ち、社会全体の動向を観察するうえで、管制塔的地点を占めている」のが、「若者」と「女性」だからである。

本書は三章からなるが、第一章では現代日本社会を著者の視点から「大人社会」として、第二章では女性の視点から「男性社会」として、第三章ではドイツ一九世紀末との対比から「個性と感性の時代への過渡期」として捉えようとする。

若者の「大人社会」への挑戦は企業、教

育、政治の分野で捉えられる。いわゆる新人類社員の登場、頻出するデューダ、登校拒否や高校中退者の増大、フリースクールの試み、政治的無関心。ともすれば否定的に捉えられるこうした動向を、著者たちは、脱会社、脱学校、「非政治の政治」の新しい動きとして、積極的に評価する。

女性の「男性社会」への挑戦は家族、企業、政治において捉えられる。出生率の低下、夫婦別姓、女性の企業進出、アグネス論争、女性の政治意識の高揚。現代日本における女性の状況の特徴づける諸々の現象が、次々と新しい社会の先触れとして捉えられていく。

大人「男性社会」はゆらいでいる。このゆらぎを可能にしている客観的条件は、一九世紀末ドイツとの対比の元に、「機械の生産力」にかわる「個性の生産力」の台頭に求められる。「個性の生産力」の主要な源泉は個々人の個性と感性であり、青年や女性の感性や自主性を尊重せざるを得ない。サーヴィス化、情報化、ソフト化、日本的経営、家族の変貌、ポスト・モダンと新自由主義などの問題がここで論じられる。

著者たちは、非核・平和のための運動の中で「感性とフィードバックにおける独自性、行動における自主性を豊かに持ち、他者からの押しつけはいうまでもなく、できあいのものではくつして満足してくれない」青年と女性に関心を持ったという。リアリティに肉薄せんとする意欲が、ひしひしと伝わってくる好著である。

天木志保美（大学文学部助教授）

清水睦夫著

『ビザンティオンの光芒』

——東欧にみるその文化の遺蹤——

（晃洋書房・発行一九九二年二月）
（A5判・二八二頁 三、四〇〇円）

「ビザンツ？何ですか、それは。」そんなものやって何になるんですか。」日本でもビザンツ史を志す若手研究者が輩出しはじめたが、そのほとんどがこういう心ない言葉を浴びせかけられた経験を持っている。

ところが、同志社関係者のなかにこのビザンツ史に対して四〇年以上も関心を抱き続け、しかも、一貫して「中世ローマ」もしくは「ビザンティオン」という現地の歴史

史に即した呼称を使い、逆に知らない者の無知を打ちすえてきた人物のあることは、なんとも痛快だ。著者清水睦夫先生は、永年同志社香里高等学校において教鞭をとるかたわら、主として「ロシア」（先生の呼称に従う）古代史を中心としながら、この「ビザンティオン」文明の世界史的意義について熱弁をふるい、論文、紀行文を紙つづてとしながら、理解のない我が国の現状に問題提起し続けて来られた。

本書の内容は、この東方キリスト教の東欧における流れを「ビザンティオン」文明の光が及び、またそこから自立していく過程としてとらえ、各時代、地域の代表的寺院および博物館などを訪ねて、そこに当時の歴史的事件や文化的背景の説明を加えていくというものである。順に古代末期から中世初期の「ビザンティオン」時代、そこから自立した「ブルガリヤ」、同じくバルカンの「ルーマニア」、そして古代ルーシのキリスト教前の信仰に触れた後、キエフ、最後に「ロシア」のモスクワでの信仰が触れられる。東欧の正教文化圏の成り立ちがベージを追って理解できるよう配分されてお

り、それぞれ独立して、多年にわたって書かれた文章の集成であるにもかかわらず、書き下ろしの本のように読める。これもまた先生の貫いた姿勢の現れなのである。

ただ、表記に関しては、先生の場合それが武器ともなっているだけに十分注意が必要であると思われた。たとえば、古代教父の五本の指に入るヨハネス・クリュソストムスが「ヨハーンネス・クリストムス」と記され、しかも英語表記で（John Chrysostom）とあるのは、妥協的な表記をこととする私でもやはり納得できない（二ページ）。西方ラテン表記では駄目なら、ギリシャ語に従ってイオーアンネス・クリュソストモスとするか、ハリストス正教会で用いられる金口イオアンとするか。「コンスタンティノポリス」というのも、慣例化した「コンスタンティノブル」表記を使わない姿勢であるとするなら、これもギリシャ語表記ではコンスタンティヌーポリスである。

とはいえ、こうした表記の問題は本書の価値を減ずるものではない。むしろ、思い

切つて原綴りを切つて紀行本として出されたとしても、先生の意図される所は多くの人に感銘を与えたであろう。新島襄の出会った最初のキリスト教徒西洋人は「ロシア」人のニコライであつたと聞かし、キリスト教といつても東方のそれもまだ大きかつたことにそろそろ目を向けてもよいのではな

いか。

中條 毅編著

『産業関係学研究』

——労使関係研究の方法と課題——

(中央経済社・発行一九九二年三月
A5判・二〇六頁 三、〇〇〇円)

本書は、同志社大学名誉教授中條毅博士の同志社退職を記念して出版されたものである。博士は現在、社団法人関西国際産業関係研究所の所長として活躍しておられる。

本書はわが国で最初の産業関係学の体系書である。いろいろな意味で、後世に残る古典としての資格をも十分備えている。

前半では、各専門領域から「産業関係学」

の分析視点について建設的意欲的なアプローチがなされる。中條毅「産業関係学を省みて」では、内外における「学としてのインダストリアル・リレーションズ」の歴史と新しいパラダイムが追究される。博士は同志社大学に産業関係学専攻を創始した。先駆者としての苦悩・試練には前途への希望に火をともし力が含まれていた。

香川孝三「法律学からみた産業関係学」

は、日本の産業関係における法規範の構造を明らかにする。広義の産業関係学では、労使関係を支える産業社会の仕組みや制度、経済的社会的政治的文化的諸条件について考察する。

石田光男「社会政策学と産業関係学」は、労働問題研究方法のあり方について明確にする。中田喜文「労働市場論展望」は、賃金と雇用量決定に関する理論の発展とその評価について論ずる。

〈座談会〉の部分では、松村彰「産業組織論からみた産業関係学」、三塚武男「産業関係論としての労働者生活問題の課題」、辻村一郎「職場における労働問題」など七つの専門分野について興味深い討論がなされて

いる。

後半は産業関係の現代的課題。猪木武道「アメリカのロー・ファーム（法律事務所）弁護士労働時間」は、国際比較への足掛かりとするための規模別職位別の研究。菊池光造「ME型技術革新と労使関係」は、ME化が雇用に及ぼす質的影響について論ずる。

赤岡功「エレガント・カンパニーを求めて」では、企業の社会的貢献の必要性について理論的実証的分析がなされる。中條毅「九〇年代労働力対策の重点課題」は、高齢労働の活性化や「ゆとり」にも言及する。働きがい、ゆとり、生きがい等に関心をもち人たちにも是非読んで貰いたい。

今城義隆（大阪商業大学教授）

森浩一編 玉城一枝・中村潤子・佐古和枝著
『古代通信』

(学生社・発行一九九二年六月
四六判・一九八頁 一、六五〇円)

同志社大学考古学研究室出身の女性研究者三氏が一九八九年一〇月から交代で産経新聞に掲載した同名の記事を単行本としたものである。

身近な生活の問題を考古学の成果を中心にしてとらえ、文献学や民族学の知識もあわせてまとめた充実した内容である。当初生活欄に連載されたことから、大変やさしい文章になっている。また一回ごとの項目が短いので読みやすく、まさに「古代からの手紙」という表題にふさわしい。

本書では発掘調査によって出土した遺物をテーマに、「衣」「食」「住」「生活と習慣」の四つに分けて構成している。全四五項目を三氏が一五項目ずつ担当している。

副葬品の一つであるヒスイなどの玉の研究を進めている玉城氏は、『玉のファッション』の項で首飾りは男女共通、耳玉と手玉は女性のもの、そして足玉も女性のものらしいと推定する。しかし「藤の木古墳の足玉をつけた人物が男性との鑑定結果が出て話題をよんでいる」と、最新の考古学の成果も付け加えている。

装身具や馬具についてとくに朝鮮半島との関係から研究している中村氏は、『耳飾り』の項で金銀で銅管を覆うことで金属アレルギーを予防した古代の人々の知恵を紹介している。

壁画古墳の研究から考古学に入った佐古氏は、『三角形』の項で、三角形が龍の鱗の表現であり、背景に倭人の根強い龍蛇信仰があるとする。そして「三角形にかぎらず、現代人の目にはただの図形とか装飾にしか見えないものも、古代人にとってはそれなりの意味をもっていたのである」と結んでいる。

このように、身近なテーマを選びながら、内容は三氏それぞれの現在までの研究に裏打ちされたものである。

また、研究と仕事を離れた時間や家庭での女性らしい心づかいを彷彿とさせるところも多い。玉城氏は『蒸し器』の項で甑について書く前に「蒸して食べるということ、油を使わない調理法としてダイエットにもつながるのではないか」という。中村氏は『間取り』の項で縄文時代の竪穴式住居の巧みな使い分けを反映したいと、自宅の「家具と本棚に占領された壁を眺めている」。また佐古氏は『火熨斗』の項で五世紀の末に何に火熨斗（アイロン）を使ったのかという疑問に「正装用の絹の衣装に使ったとすれば熱すぎではない」と答えて

いる。

読後、考古学の各分野で専門的な研究を深めながら、日常生活の中でも研究心を持ち続ける三氏の姿が印象に残った。

現在私は同志社構内から出土した近世の遺物の整理作業をしている。江戸時代に使われた碗や皿の分類と研究については女性の視点が必要であると思う。今後の研究に励みとなる一冊であった。

また現在「古代通信」遺構編が産経新聞に連載中である。あわせて一読を願いたい。

角谷江津子（同志社埋蔵文化財委員会勤務）

辰巳和弘著

『埴輪と絵画の古代学』

（白水社・発行一九九二年六月）
（菊判・二六八頁 三、八〇〇円）

最近の発掘調査で改めて注目をあつめているものに、奈良県の唐古・鍵遺跡で出土した弥生土器の絵画がある。かなり丁寧に描かれた二ないし三層の楼閣風の建物は、これまでに同遺跡から出土しているいずれの土器の絵画とくらべても出色のものである。

三世紀前半のころの倭人にかんする記載

として有名な『三国志』の「魏志」東夷伝倭人の条に述べる邪馬台国の女王の「楼観」とはこうしたタカドノ（高殿）に類するものであったにちがいない。中国の古典にみえる「楼観」には、「物見櫓」の要素はきわめて薄い、こうした土器絵画のありようは、文書や記録あるいは金石文のみではたしかめることのできない欠落の部分、補完する資料としてきわめて貴重である。

さらに『高殿の古代学』（白水社）を公にして、大王あるいは有力首長（豪族など）の居館の特質およびそこで実修されたであろう祭儀を古代学的な研究方法にもとづいて考察した著者の、その続編ともいふべき力作が本書である。

弥生土器の絵画をはじめ、分銅形土製品や円筒埴輪の線刻図文、人物埴輪の顔面裝飾図文、さらに横穴式石室、横穴の壁面や屍床などに表現されたいわゆる古墳壁画（装飾）の図文、考古資料にみいだされるさまざまな図像などを素材に、弥生時代から古墳時代にかけての、呪術的祭儀とその精神生活のありようを丹念に追求する。

とりわけ埴輪や古墳の壁画や裝飾図文

が、墳丘に立てられたり、墓室内に表現されたものであるという、その限定された属性をたえず念頭において、形象埴輪などにみえる他界観念を、意欲的に解明しようとする問題意識とその方法が示唆にとむ。

こうした考古資料における図像の解釈は、ともすれば主観的になりやすく、恣意的に流れて説得力を欠く場合が多い。著者の考察がすぐれているのは、それらの図像のたぐいを可能なかぎり視野におさめ、他民族の事例や民俗文化などとも対比して論究する方法を採用している点にある。

第二章のアメノウズメの古代学などには、思わずハツとする指摘があつて、今後の研究に寄与する問題点が提起されている。豊富な挿図が本文の叙述を補い、その構想力もあざやかである。なお言及すべき資料もあり、問題の提出にとどまって論証の不足している部分もあるが、埴輪と絵画の考古学」ではなく、その「古代学」からの視角にもとづく、古代文化の基層探求が魅力的である。

上田正昭（大阪女子大学学長

京都大学名誉教授）

門田誠一著

『海からみた日本の古代』

（新人物往来社・発行一九九二年三月）
B6判・一八七頁・一、八〇〇円

日本の古代史は東アジア史の中で考えられてこそ本当の意味がわかる、といわれ始めてすでに久しい。こうした課題に考古学の立場からこたえようとした新しい試みがあらわれた。

本書は、「考古学からみた国際関係」「海を越えた人々の残照」「東アジア世界の王権と秩序」の三章から構成される。耳飾り・ヒスイ製勾玉・紡錘車・馬具・土器・冠など、本書であつかわれる考古学的史料はまことに多彩である。しかし、こうした品々も、それぞれひとつだけでは単なる珍器というにとどまってしまうであろう。それが著者の明晰な分析にかかると、雄弁のうたなく日本と朝鮮半島とのつながりを語りだすようになるのである。

たとえば、古墳時代中期の北部九州地方では、小さな陶製の紡錘車が墓に副葬されることがある。ややもすると見過ごしてしまふような遺物であるが、著者はそこから、

その墓の主が朝鮮半島からの渡来人女性であることをつきとめる。また、島根県の横穴墓から出土した太い環状の耳飾りからは、その被葬者が朝鮮半島と独自の交通ルートを掌握していたことがときあかされる。日本の初期須恵器（青灰色の堅い土器）の分析では、古墳時代中期の大阪府地域に、朝鮮半島の複数の地域から来たいくつもの工人集団が混在していた様子を復元する。著者の提示する史料は豊富で、論証はいつも手堅い。

また、朝鮮半島の学者の中には、日本から朝鮮への文化的影响を断固として認めないナシヨナリズム的傾向が見られることがある。新羅の古墳から大量に出土する硬玉ヒスイ製の勾玉について、韓国の学者の間には朝鮮半島製であるとする説が根強いのもこの一例であろう。著者はそうした傾向を冷静に批判し、朝鮮半島で硬玉ヒスイの産地が発見されていないことなどから、朝鮮半島の硬玉ヒスイ製勾玉を日本からの輸入品であると推定する。

著者がたとえるように、東アジア史とは確かに「淵瀬常ならむ」大河である。本書

は、この大河を漕ぎ渡るためのこのうえない水先案内の役割を果たすであろう。

山田邦和（大学文学部嘱託講師）

大野節夫著

『マルクス経済学のパラダイム

——労働による商品の取得——』

（大月書店・発行一九九二年一月
A5判・二六九頁 三、五〇〇円）

旧ソ連・東欧諸国における「社会主義」体制の崩壊は何によって生じたのか。社会主義に再生の展望はあるのか。旧ソ連・東欧諸国で実施された「社会主義的」計画経済が未来を約束するものでないのは明白である。しかし「勝利した」資本主義的市場経済も万全でないことは、この間深刻さを増しつつある先進資本主義諸国の経済空洞化、深まる不況、第三世界での貧困の拡大、地球的規模での環境破壊によって明らかである。このような世界経済の現段階を分析し、未来を展望することが可能な経済理論はどのようなものであるべきか。

こうした問題関心から、著者は本書でマルクス経済学のパラダイムの批判的再編を

試みる。本書の全体は「マルクス経済学の自己批判のために」と題した「序論」と六つの章、および「参考文献」「一覧」「後書き」からなる。「序論」では問題関心が詳述され、第一章「資本論」のパラダイムでは、『資本論』の核心をなすパラダイム、すなわち「労働による商品の生産」の限界の論定とこれに代わるパラダイムとして「労働による商品の取得」が提示される。第二章「労働による商品の取得」では、商品の二要因は使用価値と価格にあるとされた後、貨幣の必然性が論定されると共に、現実的な労働、すなわち商品生産労働から「分離」された貨幣を生む「一般的労働」が想定され、さらに貨幣の独自の機能分析が行われる。第三章「資本と賃労働——雇用の理論」では、マルクスの「労働力」商品論への批判およびこれに代わる「労働力・労働」商品論とそれに立脚した「雇理理論」が提示される。第四章「価値の生産価格への還元」ではいわゆる転形問題の批判的説明が行われ——ここで著者がポルトケヴィチ、スウィージーらの解法を評して、かれらが異時点にまたがる過程を同時点で生じるかのよう

に取り扱っている、としている点は注目される——、第五章「特別利潤の発見」では、特別剰余価値と対比しつつ「資本論」で未展開の費用——資本節約によつて生み出される特別利潤が詳論される。終章「資本主義と社会主義」では、旧ソ連・東欧諸国の「社会主義」は「国家社会主義」と特徴づけられ、再生すべき社会主義の課題は、資本によつて制約された生産力を解放しその発展を希求するところにあるのではなく、「生産力を資本による濫用、濫費から解放し」「制御する」ところにあるとさる。さらに、この課題は、権力を握った労働者が資本の独占的支配下にある生産手段を国有化するることによつてではなく、「生産者に返還する」、すなわち「自立した協同的生産者」が組織する生産・消費協同組合に委ね、「協同的社会主義を実現することでのみ果たし得る」とされる。

以上の概要からも明らかなように、本書で提示される諸論点の多くは、従来のマルクス理解からすればユニークな感を否めないが、提示された時代が時代であるだけに、また本書は、マルクス経済学者の原理的な

観点からする、数少ない社会主義論の一つでもあるだけに、ここでの問題提起を多くの研究者が真摯に受け止め検討する必要があるように思われる。なかでも前半二章で力説される著者の「資本論」のパラダイム変更の必要性や貨幣の必然性、貨幣の独自の価値規定、機能理解、終章にみられる旧ソ連・東欧の「社会主義」を「国家社会主義」とする見解——著者はこれをナチスのそれと同一視するものではないが——、再生すべき社会主義に関する独自の課題設定、その実現プロセスにおける国有化否定——不用論などは、その可否を含めて検討される必要がある。

大村 泉（東北大学教授）

横山卓雄著

『カムチャツカ学術紀行』

——激動のソ連を行く——

（京都自然史研究所・発行一九九二年八月）
（B5判・二八二頁 一、八〇〇円）

同志社大学カムチャツカ日ソ合同学術登山隊が一九九一年春にクリュチェフスカヤ火山の登頂と若干の調査を、秋には本格的

な野外学術調査を行い多大な成果をあげたことは周知の通りである。本書は学術調査隊の隊長をつとめた横山卓雄教授が野外調査を中心に紀行として著したものである。

一七世紀の終り頃にロシア人により侵略領有されたカムチャツカには多数の火山があり地質学的な興味の尽きぬ地域であるから、火山層序学、第四紀学などの分野で著名な横山教授が同志社大学山岳会から参加を求められたときには心が動いたであろう。しかし幼少年期に旧満州でロシア人の残虐行為を受けた人が心から喜んだ筈はなく、全期間にわたって複雑な心境であったことは想像に難くない。

登山隊に同行してベースキャンプまで行き、それに前後して学術調査の準備、交渉する段階で遭遇した諸々の困難についてもあつさり記述しているのは著者の人柄によるのであろう。何事でも責任は相手におしつけ、頻繁に計画を変更し、かつ連絡を怠る小役人的な手合いを相手に根気よく交渉して秋の野外学術調査の準備をした経過も記されており非常に興味深い。

本番の野外における学術調査は数度の国外調査の経験を持つ著者の最も得意とする所であり、地学の専門家のみならず一般の読者にもよく判るように、調査の実状が丁寧に書かれていて、紀行文としても優れて

いる。しかしソ連科学アカデミーからの共同研究の申し入れに関する経過を読むと、狭量で愚かな人間は何処にでもいるとはいものの、まことに情ない気持ちになる。誤字、誤植が若干あるが十分判読できる

ものである。欲をいえば、本文中に出てくるすべての地名を含む大きい地図が付いていると読者の楽しさも一層増すように思う。

西原正夫（元同志社大学教授、同志社大学アラスカ学術登山隊長）

新島襄関係文献（抄）

- | | | | |
|--|------------|---------------------------------|-----------|
| 『新島襄全集』全十巻（刊行中） | 同朋舎出版 | 徳富蘇峰著『新島襄先生』 | 同志社大学出版部 |
| A. S. HARDY, <i>LIFE AND LETTERS OF JOSEPH H. NESIMA</i> | 同志社大学出版部 | 魚木忠一著『新島襄—人と思想』 | 同志社大学出版部 |
| 『同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意—口語改記並原文—』 | 同志社 | 岡本清一著『新島襄』 | 同志社大学出版部 |
| 森中章光編『新島先生書簡集』正・続 | 同志社 | 和田洋一著『新島襄』 | 日本基督教団出版局 |
| 同志社編『新島襄書簡集』—岩波文庫 | 岩波書店 | 渡辺実著『新島襄』 | 吉川弘文館 |
| J・D デイヴィス著・北垣宗治訳 | 小学館 | 森中章光著『新島襄先生』 | 同志社新島研究会 |
| 『新島襄の生涯』 | 同志社校友会 | 加藤延雄・久永省一共著 | 同朋舎出版事業部 |
| 『新島先生記念集』 | 同志社校友会 | 『新島襄と同志社教会』 | 新教出版 |
| 『明治文学全集第四十六巻—新島・植村・清沢・網島集—』 | 筑摩書房 | 吉田曠二著『新島襄—自由への戦略』 | 晃洋書房 |
| J・D. DAVIS, <i>JOSEPH HARDY NESIMA</i> | 同志社 | 井上勝也著『新島襄—人と思想』 | 晃洋書房 |
| 森中章光編著『新島襄片鱗集』 | 丁字屋書店 | 北垣宗治編『新島襄の世界』 | 同志社 |
| 森中章光編著『新島襄先生詳年譜』 | 同志社・同志社校友会 | 同志社社史資料編集所編 | 同志社 |
| 永澤嘉巳編『新島八重子回想録』 | 同志社大学出版部 | 『同志社百年史 通史編Ⅰ・Ⅱ』 | 同志社 |
| | | 『同志社百年史 資料編Ⅰ・Ⅱ』 | 同志社 |
| | | 同志社社史資料室編『創設期の同志社』 | 同志社社史資料室 |
| | | 同志社社史資料室編『追悼集—同志社人物誌—Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』 | 同志社社史資料室 |
| | | 雑誌『新島研究』 | 同志社新島研究会 |
| | | 雑誌『同志社談叢』 | 同志社社史資料室 |